
イチゴがいた

たけ10005

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イチゴがいた

【Nコード】

N7919G

【作者名】

たけ10005

【あらすじ】

僕等がいたファンフィクションです。僕等がいたのファンや、知らない人向けです。ほとんど例外無しwなぜ今か？平成二十一年六月十二日発売のベツコミに、連載再開予定だから！この小説は、ブログ連載用です。本編と流れは似てますが、細かいところは違います。

一話

「矢野元晴です。よろしくお願ひします」

ここは高校。私達は、ピカピカの一年生。

今、矢野君という人が自己紹介すると、周りの女子がざわめく。

「あの人、カッコイイ！」

「ホント、彼女いるかな？」

「いるわよ……」

それを見た男子は、ざわめき始める。

「感じワライ」

「でも、面白そう」

私の第一印象は、「近寄り難い」

「七美」 お昼食べよう

中学生からの友達に誘われ、ひよこひよこ事ノる。

「ねえ、矢野君って笑顔可愛いよね」

またその話か……

「ねえ、七美は？」

「え？」

とっさのことで反応に困った。でも。

「苦手……」

一瞬の静寂。私を初めて見た人は、珍しい生き物を見る目を向ける。

「え？　なんで？　結構矢野君の周り楽しげだよ？」

ふと、矢野君を見る。

第一印象とは裏腹に、周りの男女は楽しそう。

「ゴメン……」

私は、失言してしまったかも。

「いいのよ、さ。さっさと食べちゃお」

花ちゃんは気を使って話を変えてくれた。

「では、風紀委員を決めます！」
で……矢野君と同じ委員に。

みんなうらやましがる。でも、矢野君はやる気無さそう。やだなあ
……ユーウツ

「任せるよ。じゃー！」

「うん、じゃ！……って！」

矢野君は行ってしまった。やっぱり苦手。

文化祭準備も、抜け目なく とんずらする矢野君。

「もー！ こんな所にいた！」

私は、矢野君を見つけて怒る。

「やべ、逃げろ！ 竹内」

「お、おう」

矢野君は親友の竹内を味方につけ、逃げる。

「こら〜！」

矢野君は、振り向きざまに言った。

「そついや、お前他の女子とは違うよな？」

「え……？」

私、変人？ と思って固まると、矢野君は笑った。

恋に落ちるの”落ちる”とはなんのことかわかった……。

「お前、名前は？」
うそ。

「高橋……高橋七美。名前も知らなかったの!？」

「ワリイワリイ。オレのことは矢野って呼び捨てでいいよ。高橋」

矢……野……。矢野。

「や、矢野！」

「ん？」

「明日は手伝ってよね！」

矢野は、再び笑った。

「気が向いたらな」

やっぱり、カツコイイ。

「じゃ」

見とれていると、我に帰った時には矢野の姿はなかった。

文化祭準備の放課後、矢野と二人きりになった。

「ね……矢野？」

「ん？」

「いつか私に矢野が『他の女子とは違うよな？』って言ったけど、
どういう意味？」

矢野は、相変わらず私に九十度横に向いて座ってる。

「ああ、オレを特別視しないっつーか。そんな感じ」

あ……違うの……それは……。

「私、矢野のこと苦手だったから」

矢野は、またにっと笑う。そう、その笑顔がいけないの。

「『今は……、好きなの』ってか？」

私は、うつむく。

「うん、矢野のことが好きかも」

矢野の答えは！？ また明日！

二話

矢野は、私に九十度横に向いて座ってる体勢を崩して向き合う。

矢野は、ゆっくりと口を開く。

「ゴメン、わからない」

え……？ わからない？

「それってどういう……」

矢野は、立ち上がる

「ごめん」

矢野はズンズン歩いて行ってしまう。

腰が、砕けて立ち上がれない。行ってしまふ。

「待って！」

私は叫んだ。だけど……行って、しまった。

矢野の親友である、竹内君なら知ってるかも。

「竹内君、その……あの……」

「また矢野目当て？」

え？ なんでわかったの？

「またってどういう……？」

竹内君は、笑顔を絶やさず語る。

「オレの所に女の子が寄って来たからびっくりしたらさ、さらにびつくり！ クラスの三分二が惚れてる。矢野のこと。」

そ……んな……私なんて、かなうわけない。

竹内君は、ちよっと いじわるそうな顔で微笑む。

「矢野はイヤツだけど、女は嫌いなんだ」

嫌い……？

「体悪いの……？ 心とか？」

竹内君はお腹を抱えて笑う。

「違う違う、矢野が中学生の頃の話だけど。聞く？」

竹内君は急に真顔になる。

私は、首を縦に振った。

「矢野は暴力彼氏から奈々^こって娘を奪ってさ。けど奈々は、矢野を裏切って元カレとも会ってた。その時、元カレの車で交通事故死したんだ」

それじゃ……かなわないじゃない。私なんか、元カノにかなうわけがないじゃない。

美人ってわけでもない、数学が苦手で赤点取る私が、かなうはずないよ……。

「亡霊じゃない」

竹内君は、頷く。

「そう、亡霊。どうする？ 諦める気になった？」

続きは明日！

3話

「私の気持ちは変わらない」

矢野がどんなに辛くても……辛いからこそ。

「矢野、どこにいるかわかる？」

真つ直ぐ竹内君を見ると、竹内君はボーっとしていた。

「竹内君？」

竹内君はフツと我に返り、矢野に携帯で居場所を聞き、教えてくれる。

「さっきの話はナイショな」

なぜか、彼から笑顔が消えていた。

私は矢野を探したけど、いなかった。仕方なく、明日詫びることに。

「矢野〜！ この看板抑えて！ 男手が足りないの」

矢野はしぶしぶ手伝う。

私はかなり決心して話しかける。

「矢野、なんかクラスに溶け込んだね」

「変わらないから」

また、わけがわからない。

「高橋、この前からも変わらずに接してくるから」

「そ、そう？」

かなり無理してるけど。

文化祭当日。

プログラムもたけなわ、後夜祭のフォークダンスの時間。女子は、そわそわしながら矢野や彼氏を探している。

矢野と踊りたい。

矢野を探しに体育館裏へ。

「矢野！」

矢野は夜空を見上げていた。

その危なげな瞳に恋をした。不意に見せる優しさに恋をした。あとは……。

「矢野！ 見守ってるから、ひとりだと思わないで」

矢野は振り返って開口一番、笑顔で。そう、その笑顔に恋をした。

「好きだよ」

え？

「なにが？」

「高橋が」

ええ！？

「高橋なら、わかってくれそうだから」

何を……？ あ。

「元カノ？」

「ああ。ただし……『約束』ちょうだい」

約束とは！？ 続きは明日！

四話

七美は、矢野に詰め寄る。

「矢野……」

「ごめん。隠す気じゃなかった。ただ……傷つけるだけじゃないか？ って」

竹内君が駆けつけて来る。

「矢野！ どうしたんだ？ なんの騒ぎだ？」

矢野は答えない。

「オレ、行くわ」

矢野は俯いてゆっくり歩いて去って行く。

遠い。さっきまで、あんなに近くにいた矢野が、こんなにも遠くに感じるなんて……。

私は、迷っていた。駆け出して追いつくことができる。でも、できない。

「できないよ……矢野……」

「高橋……」

竹内君の声。いつもとは違った、いつもより強くはつきりした声。

この時、振り向いたら何かが変わっていたのかな？ 私と、矢野……

……。山本さんと、竹内君。四人の人生は大きく変わったんだろっね……。

だからこそ……私は視線を泳がせるのがせいぜいで。

「高橋さん……惨めね」

山本さんのこの言葉から逃れたくて。

勝ち組姉妹と私じゃ格が違って。。。

「ちよつと、なんのつもりよ山本さん！」

クラスの名号から逃げたくて。山本姉妹から逃げたくて。

「高橋……オレ……」

竹内君から、逃れたくて。

私は矢野と反対の方向に歩いた。

調理実習室。矢野に始めて私（他多数）の料理を食べさせた所に入つて、内側から鍵をかけた。

「バカだね……私は。山本さんの言う通り、惨めね……」
廊下に響く足音が一つ。

ここに用があるとすれば、目的は私。逃げないと！ 周りをキョロキョロ見る。もう放課後だから、いつそ隠れてやり過ごそうか……？
「高橋」

竹内君？ やつぱり、私を……。

「そのままでもいいから、聴いて」
私は何も言わない。

「高橋、高橋が好きなの人も、高橋を好きな人も多分、高橋に幸せになつて欲しいと願つてるハズだよ」

私の幸せ……？
「それは、何？ わからない。わからないよ、竹内君」

「今は、わからなくて良いと思うよ。でも、高橋は一人じゃない」
竹内君……。

「竹内君は、私のこと……」

「ああ、好きだ。でも、今は違うだろ？ 相手は、オレじゃない」
矢野……。

気がついたら、私はあの時と同じ、体育館裏に行っていた。

「矢野！」

矢野は、確かにそこにいた。

「私…… 矢野を受け入れたい」

矢野は、こっちに向く。

「許してくれるのか……？ オレを」

私は、答えの代わりに笑つた。

「許すとか、許さないとかじゃない。私と出会う前のことだもん」

私は駆け出して、矢野にダイブした。

矢野と学校近くの堤防に行った。

私が支えてあげなきゃ、矢野との約束は果たせない。

「矢野。奈々さんに対しての想い、話して良いんだよ？」

矢野は、少し先に歩いて向き返る。

「いいのか？」

私は頷く。

「『矢野から絶対離れない。』約束したし」

「そっだよな、隠すのはもう止めだ」

「そっだよ」

矢野は、私の頬に手を翳す。でも、その先に私はいない。

矢野の初めての涙。

「生きて帰ってきて欲しい」

その一言が、最後の願いであるように。

私は矢野を抱きしめることもできなくて。

「ごめん……やっぱ無理」

私は一歩後ずさる。

「私は奈々さんに裏切られた矢野を幸せにしたかった。でも、矢野は奈々さんを宝石として扱ってる。私の方が亡霊みたい」

夢を見た。矢野の夢。思い出の夢。

シングルマザーの母を想って言った矢野。

「早く大人になって、守られる側じゃなくてオレが守る側になる」
明るくて人気者の矢野の想い。

そんな矢野と付き合い始めた山本奈々。しかし、奈々は矢野を裏切って事故死。その後、妹の山本有里こと山本さんは、矢野と関係を持った。

五話

矢野は、孤独に震える山本さんに同情のような感情を抱いただけ。愛したわけじゃないとは、さつき聞いた。

矢野の幼なじみで親友の竹内君は、私に片思いして……。私は友人としか思えなくて……。

「もういや……傷つきたくない……矢野との約束、守れそうにない……」

矢野は、後ろを向く。

人はなぜ、守れない約束をするのだろう……。

「悪かった」

そう言っただけで去る矢野。

「高橋、矢野のこと嫌いになったのか？」

開口一番、竹内君が私の机に歩み寄って言った。

「うん。竹内君にとっては良かったじゃん」

何を言ってるのだろう……私は。心にもないこと言っただけ、嫌みな女で。

「そんなことないさ。そもそも大の親友の彼女に横恋慕よこれんぼなんて、初めから間違えてる」

竹内君は生真面目だ。それに優しい。この人のことを好きになれば良かったのに。

「なんで……私のこと……」

「矢野のこと、真剣に見てるから」

そんな理由で、人を好きにはならないと思う。

「ホントのこと言っただけ」

竹内君は、頬をかきながら言った。

「オレが矢野の元カノの話した後、『私の気持ちは変わらない』って言ったの、けっこう効いたんだよ。矢野に憧れる娘こでそんな娘い

るんだな……って。こんなにも、真面目に恋愛できるんだな……って。」

そうか……私はそう思い続けてた。

「なあ、高橋」

竹内君は、あの日の私のように真っ直ぐ私を見た。

「オレのほうが高橋を幸せにできる。オレが高橋を守りたい」と言う。

「ごめん。やっぱり私、行く」

矢野は多分、最後に言葉を交わしたあの土手だ。

矢野は駆け足で向かう私を待ち構えているかのような待ち方をしていた。

私は矢野を覗き込んだ。

「来ちゃった」

矢野が土手で寝そべっていたまま、私にこう言った。

「オレは今でも奈々が好きだ」

ズキツとくる。

「なのに、それでもおまえのことが好きなんだ。」

今度はホツとする。

「……ムカつく。オレの心わし掴みにして、振り回して……。でも、好きなんだ」

私も、そんな矢野が好きだよ。

「過去が書き換えられればいいのに……。でも、そんなことはできない。不可能だ」

矢野は、じつと私を見る。私は聞く。

「”過去に負けない今”って……どんなの？」

矢野は黙ってキスをする。

これが答え。

はれて矢野と私は仲直り。そこで思ったことを口にする。

「山本さん、なんで『惨め』なんてひどいこと言ったのかな？」

矢野の隣に仰向けに寝そべる。

「あいつ暗いから、コミュニケーションうまく取れないんだ。心に傷を負ってるのは、あいつの方が上。なのに、あの状況で高橋がオレを追ったら、かえって傷つくとか冷静に思ったんだろ」

そっか。私から離れないと、私は救われない。

「山本さん、お姉さん亡くしたんだもんね……つらいよね……」

「それだけじゃない」

「え？」

私は、矢野の顔を見る。すると、矢野も私を見る。それが嬉しい。

「あいつ、奈々が出掛ける前に奈々とケンカしたんだ」
うそ……

「じゃあ……」

「ああ、謝れないまま死なれた」

そ……んな……。

「だからさ」

矢野は、私の頬に手をやる。

「二人の分も、幸せになろう」

そっか……これからは、もっと幸せになれますように！

話が進むにつれ、原作とは離れ、個人的名言以外オリジナルなのは多分最後の二話くらい。最初の惚れる所はものすごくおおざっぱ。その辺も、また回想します。

話の流れも、もっとタイミングが違ったり、もっとすったもんだしたところをバツサリ編集。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7919g/>

イチゴがいた

2010年10月20日19時33分発行